

齊藤隆夫著

『戦後イタリア労働組合史論』

宮前 忠夫

イタリアに魅せられる人は多く、それは日本人に限らない。きっかけや動機、対象や分野、方法や目的なども千差万別である。それに値するほどの豊かな魅力を持つ国であることはまちがいないようである。歴史的な深みはもちろん、日本との共通点と共に対照的なあるいは正反対な点も併せもっていることが、こうした魅力に輪をかけている。数や量のみを問題にするわけではないが、組合員数1052万3000人・組織率38.0%（1995年）と、欧州主要4カ国のなかで、最大の組織率を維持し続けているイタリアの労働組合運動もそうした対象の1つである。ここでとりあげる『戦後イタリア労働組合史論』の著者、齊藤隆夫氏もこの国の労働組合運動に魅せられた人と——少なくとも評者（宮前）の目には——写る。

◇ ◇ ◇ ◇

「この不揃いの章構成からなる一書は私の過去20年余りにわたるイタリア労働組合史研究の産物である。本書を構成する10編の論文はその時々私に抱いていた問題意識に沿って、書かれたものであって、あらかじめ設定された全体的な構想に沿って書きすめられたものではない（あとがき）と、著者自身が断っているように、本書はかなりの長期間の間にそれぞれ独立に仕上げられてきた論文から成っている。まず、本文部分の「章構成」を紹介しておこう。

序章 労働組合史論の課題と方法

第1章 イタリアにおける階級的労働組合の生成過程

第2章 「階級的労働組合の運動の光と影」——1950年代のイタリア労働組合運動——

第3章 1962—63年イタリア金属機械協約闘争の意義——近年の日本労使関係研究が見落としたこと——

第4章 イタリアの危機と労働市場——労働者の階級的統一の諸条件——

第5章 個別企業に見る“暑い秋”

第6章 労働組合運動の団結構造——イタリアの協約権分節化を中心に——

第7章 危機と対決するイタリア労働組合運動——その戦略と帰結——

第8章 CGIL 方針転換の意味するもの——大企業労働組合運動に限定して——

第9章 イタリア労働組合運動とEC統合戦略

書名そして「章構成」に、すでに表れているように、「労働組合史論の課題と方法」（序章）という課題設定に立って、年代的に、またテーマや分野的にも、焦点を絞って、「階級的労働組合」の生成と展開を追跡——つまり、「史論」を展開——しているのが本書の全体としての特徴である。本書の特徴を見る上で重要な点なので、やや具体的にいえば、齊藤氏は、戦後の我が国における労働組合史論の主要著書を批判的に検討しつつ、「労働組合運動の歴史は究極的には〔マルクスの言う意味での〕貧困化克服の運動の歴史であり、その意味で変革主体形成の歴史」であるにとらえ、「労働組合の日常的な要求にかかわる個々の具体的運動はマルクスの意味での変革主体形成との関連の中でのみ論ずるのが労働組合史論」という「課題」設定をする。そして、この課題に取り組む「方法」として、①「資本主義の発展の帰結としての労働者タイプ変化」、②「組合の掲げる政策」、③「組合組織形態」の3つに注目する、としている（以上、序章）。すなわち、この3要素とその相互関係を、具体的運動のなかで実証的に分析・総合することを通じて「課題」に迫るというものであり、方法論としても学ぶべき所が多い。

◇ ◇ ◇ ◇

次に内容上の特徴の中から、いくつかをあげたい。

第1は、「ある時は我が国労働組合の動向への対抗的組合像を提示するべく論文をまとめてきた」（あとがき）というとおり、日本の労働組合運動とそこにおける「変革主体形成」が、著者の問題意識のなかに含まれていることである。これは60年代の日本の「合理化」反対闘争を、同時期のイタリアの金属機械部門の労働協約闘争と比較しつつ、両国の「状況差」とその原因に言及するなど、とくに、第3章に具体化されている。

書 評

第2は、本書の全体が、第2次大戦末期と戦後のイタリア労働組合運動の通史としての内容も備えていることである。この点は著者がどこまで意識したかは別として、各章が重要な時期の主要な運動展開をそれぞれとらえて書かれた論文であり、繋げて読むことによって通史的意義をもつこと、また、とくに、第6章以降の各章について言えることだが、各章がそこでのテーマについて、それに関する戦後の特徴的变化を概括しながら、本論展開をしていること、によっている。

第3は、課題設定と方法論に沿って、運動とその変化を工場・職場レベルで、とくに生産技術や労働者タイプの変化との関係で——イタリアの研究者の成果をも活用して——分析していることである。この点は、対象への接近、資料入手の困難な問題でもあり、貴重な試みである。なお、それぞれの企業・工場・職場（たとえば、フィアット・グループがイタリア経済に占める位置、本社工場にあたるミラフィオーリの位置づけ）や労働組合（たとえば、金属機械産業労働運動とFIOMを始めとする各金属機械産業労組の特徴）についての、ある程度まとまった形での特徴づけがあれば、もっと説得的になったと思われる。



本書はイタリアの労働組合運動に関心を持ちはじめたばかりの読者、以前から関心を払ってきた活動家、専門的研究者などのいずれにとっても得るところ

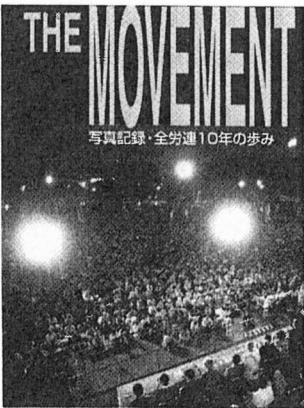
ろがある労作と確信する。それは何より、収められた論文の一つひとつに、共通して、「課題」に迫る著者の真摯で粘り強い追究姿勢がみなぎっているからである。イタリア労働組合運動（史）になじみの薄い読者は、予備知識なしに読むと固有名詞などにとまどうことがあるかもしれないが、関心の赴くままに、章毎に拾い読みすることも可能であろう。イタリア労働運動に少しでも関心を持ち、歴史的に解読しようとする人々にぜひ一読を勧めたい。

最後に、齊藤氏自身が「変革主体形成を論ずる以上、労働組合運動だけでなく労働運動をも対象とせねばならないことは明らかである。この課題は他日を期したい」（まえがき）としていることに関連して一言。

90年代に入ってからグローバル化とEU（欧州連合）統合の急速な進展の下で、イタリアでも労働運動主体と「労使関係当事者」の遂げている激変が続いており、労働者階級の変革主体形成が一国レベルだけでなく、EUレベルでも、国際的レベルあるいはグローバル（地球的規模）レベルでも改めて問われている。イタリアは、こうした激変がとりわけ著しい国の1つである。「この課題」にぜひとも取り組んでもらいたい、と期待するのは、評者のみではないであろう。

（御茶の水書房、1999年6月刊・5500円）

（みやまえ ただお・会員・欧日問題研究者）



写真記録・全労連10年の歩み

主な内容

- 働くもののナショナルセンター誕生
- つくってよかった全労連
 - リストラに抗して
 - 仲間の輪を広げて
- 10年の軌跡
- 新しい峰をめざして

仕様
 A4判・表紙カラー
 本文40頁・写真127点
頒価
 300円

予約
受付中!

あなたの手元にぜひ1冊

申込先/アキコ企画 〒105-0003東京都港区西新橋3-17-8 TEL03-5470-4545 FAX03-5470-4548